

YA…Young Adult【ヤングアダルト】の略で、  
12才～19才くらいの人たちをさす言葉

# YAだより

Vol. 29  
2024年11月号  
船橋市東図書館



今号は…

オーデンセ市姉妹都市提携35周年記念！

バンド・Ålborg（オールボー）

Miyaさん インタビュー 

# オーデンセ市姉妹都市提携35周年記念!

## バンド・Ålborg (オールボー)

### Miyaさんインタビュー

船橋市とデンマークのオーデンセ市が姉妹都市提携を結んで今年で35周年！そこで、担当も大ファンのバンド・Ålborg（読み：オールボー。デンマークの都市の名前から取ったバンド名！）のアコースティックギター・ボーカルでデンマークへの留学経験を持つMiyaさんに、初のアルバム「The Way I See You」のリリースツアーや製作期間のエピソード、デンマークでの生活や好きな本について、お話を伺いました。

—Ålborgは7月に初のアルバム「The Way I See You」がリリースされました。それに伴い行っていたツアー「Hello, we are Ålborg!」の感想や、印象に残ったことがあれば教えてください。

**Miya:**とにかく楽しかったのと、とにかく疲れました（笑）。やっぱり、体力使ってたんだなーって。ほんとに楽しかったんですけど。「仲間と旅するのってこんなに楽しいんだなー」って思った反面、ツアーファイナルと同時ぐらいに、携帯を壊し、体調も壊し（笑）…ちょうどゴールインって感じでした。でも、とっても楽しかったです。印象に残った出来事は…。かまちゃん（鎌田）の赤ちゃんが、ツアーファイナルの前日に生まれました。

—最終日のMC（ライブで、曲と曲の合間に話す時間）でも、くるみ（安田）さんが「アルバムもリリース、赤ちゃんもリリース」とおっしゃっていました。

**Miya:** なんだそれって感じですけど(笑)。  
おめでとうございますですね。

ー全国7か所を回るツアーということでした。移動中は、だいぶ体力を使ったのではないのでしょうか？



**Miya:** そうなんですよ。私たちは新幹線とかを使わなくて、メンバーも多いので、メンバー5人と、いまお世話になっている「カクバリズム」っていうレーベルのスタッフのかほさんという方と6人で、すべての都市を、大きいバンを1ヵ月借りて、毎週回るっていう。ロードムービーが作れそうな1ヵ月でした。

ーメンバーみなさん、バンドのMVを自身で作っていたり、イラスト、録音など、色んなことが得意な方が多そうなので、ぜひ、待ってます。

ーアルバム「The Way I See You」について伺います。「アルバムを出す」とは具体的にどのような作業をするのかな？という部分や、制作中のエピソードがあれば聞きたいです。

**Miya:** アルバムというのは…シングルというのとは別で。シングルは「1曲を世に出す」ということで、アルバムは、別に曲数が決まっているわけではないんですけど、私たちは「10曲入ったアルバムをリリースするぞ」ということで。私たちも初めての経験だったので「なんだろう…アルバム制作って」って感じで始めたんですけど。カクバリズムの社長の角張さんや、かほさんから「Ålborg、曲もあるし、アルバム作ってみたら？」って提案されて「え、作りたいですー！」ってなって「ぜひぜひ」ってなって…。レコーディングスタジオを予約したり、何の曲を

入れるのか、曲順とかも話し合ったり。あとは、私たちは、ジャケットとかのデザインも自分たちでやりたいねって。そういうことが好きなので「じゃあ、何にする？タイトルどうする？」と。くるみさんが、デザインすることが好きなので、彼女に私が「こんなのがいいんだよねー」って話してみたり。音のお話だと、レコーディングスタジオで「こんな音にしたいんだよねー」ってみんなで話すっていう。録音作業は全部で一週間ぐらいでした。小田急線の梅が丘というところに「hmcスタジオ」っていうところがあるんですけど、そこで毎日、朝から晩まで、ずっと箱詰めになって過ごしました。



ー本当に一週間丸々いたような感じですか？

**Miya:** そうです。そんな感じです。もう連日朝から晩まで、小さい箱に…スタジオにいるので、みんなの暇のつぶし方とか、好きなお菓子とかに詳しくなりました（笑）。

エピソードとしては…朝、「今日もおはようございまーす」ってレコーディングスタジオに行って、スタジオにいるエンジニアさんも「よろしくー」って、それで始まるんですけど、ある時、くぬぎっち（功刀）が、夜な夜な徹夜でスタジオにいたらしくて。徹夜でギターのアレンジを考えて、で、体力を切らして、寝てた。それも、高校時代の、膝小僧に穴の空いたジャージを履いて（笑）。「あれ？くぬぎっちが寝てる！」ってみんなで（笑）。そのぐらい、みんなで集中力を一つの部屋に集めた一週間だったなって感じですよ。アルバム制作中はそんな感じですね。

ーアルバム「The Way I See You」のジャケット写真はくるみさんが撮影されたものなんですよ。水面が波打っている写真。あれは…海ですか？

**Miya:** そうです。なんか流動的なもの…というか「反射するものがないよね」って、最初に話してたんです。アルバムのタイトルが「The Way I See You」っていう…ちょっと日本語にするのが難しくて毎回困っちゃうんですけど、私が、視点とかに興味があって。「なんか反射するものがないな」っていう。「人と話してる時って結局…自分を知るよね。」って感じになって「なんか反射するものがないなあ」って。それで「海とかどうでしょう。Ålborgは、世界に出てライブしたいし」ってなって（笑）。で、くるみが…くるみは横浜市の鶴見区出身なんですけど、「うちの近くに海あるから私撮ってくる！」って言って（笑）。「え、じゃあお願い！」って言って、撮ってきて「じゃあこれにしよう！」って（笑）。なのであの写真は、私たちの家の近くの海です。

—どこの海なのか気になっていたんで、知れてよかったです（笑）。アルバム「The Way I See You」では、1曲目と最後に、同じタイトルの曲の別バージョンが収録されていますね。

**Miya:** はい、「Same page」と「Same page!」。



—そういう「同じ曲のバージョン違いを入れてみよう」みたいなことは、メンバー内で話し合ったり「こういうのやりたいね」と話していたんですか？

**Miya:** 元々は速いバージョンの「Same page!」がメジャーだったんです。「ライブで最後にやりたい短い曲」っていう感じで作ってたんですけど、ライブやってるうちに…。あと、私たちは、練習とかでスタジオにいと、色々なバージョンをやったりするんですけど…すっごい速い「Girl」（Ålborgの楽曲）とか（笑）。そうやって遊んだり、キーを変えて歌ってみたりとか…そんな中で、「Same page!」のキーや音、コード感を変えてみたりしてやってみたら「いいねえ」ってなったり。

あと「ゆっくりの方が伝わるなあー」って思ったりして、「Same page」ができたんですね。で、レコーディングするってなった時に「始まりと終わり同じ曲にしちゃう？（笑）」てなって。で、ツアーもほとんどの公演で「ゆっくりバージョンの『Same page』で始まって、速いバージョンの『Same page!』で終わる風によっか」ってなりました。

— 素敵ですね。個人的には、アルバムを通して聞いて、最後の「Same page!」から「Same page」に戻るところが好きです。何周でもできる。

Miya: ありがとうございます（笑）。



— 去年の夏ごろのÅlborgと今のÅlborgを比べると、曲の後半に向けてグッと盛り上がっていくような曲が増えた印象があります。メンバー内で「こういう曲を作ってみよう」とか「こういう音作りにしよう」みたいな意識はあったのでしょうか？

Miya: いま聞かれて「確かに…。」となった部分は正直ありますが、これは私の個人的な見かたなんですけど…。「ドラムってやっぱり、ゆっくりのリズムでずっと叩いてるのって退屈だよなー」って思うんですね。禄郎（岩方）が、それで退屈そうな顔をしてたりするので（笑）。

「The Way I See You」っていう曲がそれこそ、最初ゆっくりで始まって、最後盛り上がっていく曲だと思うんですけど…その曲は「禄郎が楽しそうだなー」って思うというか。なんか「禄郎が生き生きドラムを叩いてるのを見るのは、一緒にやるのは楽しいなー」と思います。

— Ålborgの曲を聞いていると、歌詞が、簡単な言葉でスッと入ってくる気がしていて。演奏も、それぞれの鳴らしてる音がすごくわかるという

か。例えば普段、色んな音楽を聴いていて「今、ベースってどんな音を弾いてるのかな」みたいなことって、自分から進んで「ベースの音を聴くぞ」って思わないと、上手く聴けなかったりすることが、私は割と多いですね。でも、Ålborgの場合はあまりそういうことがなくて、各メンバーさんの鳴らしている音が見つけやすい気がします。そういう、音の数のバランス、音の隙間の作り方みたいな部分はどういう風にしていますか？

**Miya:** 嬉しいです。おっしゃる通りで、私たちも、聴く音楽としては、プログレッシブみたいな、ややこしいことをしてるものとか、ロックとかも好きなんですけど。ただ私たちがやる音楽は、なんか…耳を澄まさなくても、みんなのことが聞こえるようでありたい。「人の話を聴くのって大事ですよ」っていうのと似ているかもしれないんですけど。誰か一人が目立ちすぎることもなく、みんなの音が聞こえる環境を作るのが好きかもしれないです。なんでしょ…素朴なものが好きです。歌詞もそうですね。素朴な言葉で伝わる、シンプルが好きです。音楽も歌詞も、大事なものを伝えたいって思っています。一応「私が歌っているバンド」みたいな感じなんですけど、でも全然こう…変なこと言っちゃいますけど、なんかこう、誰も出たくないというか。5人一列に並んでいるのが理想だなあって思っています。ドラムが出すぎるとか、ボーカルが出すぎるとかじゃなくて、いい感じに、みんながいるのが好きです。

—他のインタビューでも「私がたまたま真ん中で歌ってるだけ」と。

**Miya:** そういうことです。ほんとにたまたま歌ってるだけで。別に歌がうまいわけでもないし（笑）。



—いやいやいや（笑）！ジャケット写真のキラキラした水面も、メンバーそれぞれがキラキラ…という感じで素敵です。

—学生時代にデンマークへ留学していたということですが、留学する前、学校ではどんな風に過ごしていましたか？

**Miya:** 高校と大学でも違うと思うんですけど、高校生のときは、同じ高校に通っていたくるみとバンドを組んでいました。その時はÅlborgとは全然違うバンドだったんですけど。パンクロックみたいな音楽が好きだったので、元気な音楽をやっていましたね。そのときに他の3人、Ålborgの仲間とも出会って…って感じだったんですけど、大学は、くるみとも離れちゃって、退屈してたと思います（笑）。一人で。学校の授業はすごい好きだったんですけど…。ほんとに「大学で友達どうやって作るんだろう～」って4年間思った…（笑）。一番前の席で授業聴いて、放課後は毎日のように映画を観てました。映画を観られる部屋っていうのがあって、授業がない日にはそこに通って映画をたくさん観るっていう日々を過ごしてました。

—どんな映画を観ていたんですか？



**Miya:** 何観てたかな…本当に色々観てましたけど…。その時は、アキ・カウリスマキっていうフィンランドの監督を、その部屋で、DVDのジャケットで惹かれて観て「なんていい映画なんだろう」って思って。あとは日本の映画だと、小津安二郎をよく観てます。フランス映画に興味を持ち始めたのも大学の時ですね。「アメリカ映画がおもしろいなー」って最初の頃は思ってたんです。それが、「フランスの映画ってやっぱおもしろいな」「古いものっておもしろいなー」って思い始めたのは、大学のその部屋です。いい場所でした。

ーデンマークでの生活について、日本と似ている、違っていると感じたり、好きだと思った部分について教えてください。

**Miya:** 20歳の時に行ったんですよ。その前に旅行をして「北欧の雰囲気なんか肌に合うなー」って思ってデンマークへ行ったんですけど、その中でも私が行っていたのが「フォルケホイスコーレ」っていう制度で。日本で暮らしているとあまり馴染みがないかもしれないんですけど、すごく大胆にいうなら、「自分探しをする学校」みたいなところ。全部のホイスコーレがそうかはわからないんですけど、私の行ったところは、日本でいう、高校を卒業した子達が大学に入るまでの「ギャップイヤー」の子たちが多くいるみたいな感じで。成績とかテストとかもなく、全寮制で、私のときは人数が多くて、全部で100人くらい。ただ好きなことをやって、大学で学びたいことを考えるみたいな時間だったんですよ。

ーそういう時間があるのはめちゃくちゃいいですね。



**Miya:** そうなんです。日本だと、高校を卒業して大学にそのまま行くのがメジャーな気がするんですけど、デンマークだとそういう考え方は全然なくて。むしろ、せっかく大学に行くなら、本当に学びたいことをよく考える時間が大事とされてるのが、素晴らしいなと本当に思いました。

ー日本でもホイスコーレのような制度が増えたり「本当に学びたいことをよく考える時間が大事」という空気感になってくれたらいいな…というのはすごく思いますね。Miyaさんが取っていたのは「ソングライティング(作曲)」の授業ということでしたが、他にも科目はありましたか？

**Miya:** ありました。結構種類があったんですけど、学期ごとに変わったりもしてて…。私の行った学校はちょっとアートっぽい、アートに関わる分野が多かったと思います。「ソングライティング」「アート」「ライティング」って授業もあったり。私は「テキスタイル」って授業も取ってました、服を作る。あとは、ただ映画を見るだけの授業もありましたし。あとは…読み書きが出来ない子も、2人だけなんですけどいたので、その子たちのために「デンマーク語」って授業もあったり「ポップカルチャー」ってのもあったり。結構たくさんありました。

— その中から複数個の授業を取ることもできる？

**Miya:** 複数個選べました。私の場合は、月(曜日)・木に「ソングライティング」、火・金に「テキスタイル」を取ってて、水曜日は午前中に「キャンプファイヤーギター」って言って(笑)、キャンプファイヤーを囲んでアコースティックギターを弾くっていう授業を取ってて。で、午後に、映画を観るだけの授業を取ってたんですけど、でも全然、途中で変えてもいいっていう感じでした。



— 先生が教えてくれるんですか？

**Miya:** そうなんです。先生が何人かいて。「ミュージック」の先生は「ソングライティング」も「キャンプファイヤーギター」も教えたりって感じで、マルチに教えていただきました。ホイスコーレおすすめです。何歳からでも大丈夫なので。全然、退職後に通いに来てる方もいらっしゃいましたし、いつからでも。とにかく学費が安いので、おすすめです。

—お話を聞いていると、すごく楽しそうです。逆に大変だったことはありませんか？

**Miya:** 私が、なんですけど、私は英語がそこまで出来たわけじゃないんですね。海外旅行に行くのが好き、くらいでした。テストとか全然点数取ってなくて、むしろ「苦手で怖いなー」ってくらいだったので、ただ「行ってみたらなんとかなるだろう」って思ってデンマークに行ってみたって感じだったんですけど（笑）、最初はやっぱり、みんなが喋っている言葉がデンマーク語なので、そんな中で英語もわからない私がポツンと行くってのは、最初は結構ぎつかったと思います。最初の2、3ヶ月は、友達から聞いた英語を毎日書くノートを作って「何とかついて行きたい」ってやってました。ただ、みんな本当に優しくかったので。同い年の子たちが多かったのもありますし、好きな音楽とか映画とか、話ができたもので繋がって、友達できて…って感じでした。

—向こうでできたお友達と一緒にやっていた音楽があって、今のÅlborgもその方の影響を受けた、というお話もされてましたね。

**Miya:** そうなんです。



—学校の様子、興味深かったです。滞在中に図書館は利用されましたか？

**Miya:** 今お話している中で「そういえば行ったなー」って思い出したんですけど、私がデンマークに行ったのがちょうど、コロナの影響で学校が一回止まる2ヶ月前とかなので、ちゃんと元気な学校はそのときにしか見てないんですけど…その時に、その街の中にある小さな図書館に行ったなーって思い出しました。日本の公立図書館と似てました。

ーデンマークでは、日本食に触れる機会がありましたか？どのくらい日本のものがあるのか気になります。

**Miya:** 私は学食だったんですけど、日本食はやっぱり滅多にないですねえ…。日本食というか、アジアンを専門としてるお店が、学校から電車で行った大きい街…それこそオールボーっていうんですけど、その街にはあったので、もし何か欲しかったら、そこに行くしかない。

ーメインで出る料理には、どんなものがありますか？



**Miya:** パン。ライ麦パンをひたすら食べてました。ライ麦パンとバターとチーズを乗けたものを、毎朝食べてました。日本食はなかった…あ、でも、一回学校の寮のみんなで「Miyaも部屋にいるんだし、なんか日本食作んない？」ってなって、みんなでお金出し合って、高かったんですけど、醤油とか買って。何食べたかな、コロケを作ったような気がします（笑）。全てが高かった。パン粉とか。

ー醤油は、キッコーマン（株）やヤマサ醤油（株）のものが置いてあるんですか？

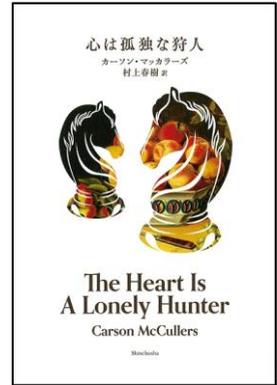
**Miya:** ああ！キッコーマンでした（笑）。



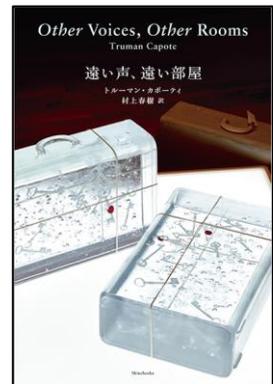
ー好きな本や「今の自分に入ってるなあ」と思う本があれば伺いたいです。

**Miya:** 前もインタビューで聞いてくださった方がいて、そのときにも挙げた本なんですけど、好きな本って言われると答えてるのが、カーソン・マックラーズっていうアメリカの女性作家の『心は孤独な狩人』。

『The Heart Is a Lonely Hunter』っていう英題なんですけど、それが私はとても好きです。舞台はアメリカ南部の田舎町で、小さい街に住む、年齢も性別も人種もバラバラの5人がいて、物語の初めでは関わりのない5人が、読み進めていくと「同じ街の人だ」ってわかってくる。その5人が、なんとなく孤独を感じてる5人というか。「ひとりぼっちだなー」ってなんとなく思ってる5人が、最後まで結局そのまま。交わったりもするんですけど、最後まで何となくそのまま終わるっていう…。自然主義っていうんですかね。自然主義に含まれるのかもわからないんですけど、何も特に起こらない…。まあ起こるっちゃ起こるんですけど、それがすごくビッグアクシデントとして描かれるっていうよりも、「ただこんなことが起こりました。みんなひとりぼっちで、こんな話です」という終わり方なんです。そういう話です…(笑)。「孤独を肯定してくれる作品が好きだな」って最近すごく思いますね。カーソン・マッカラーズの作品は、そういうものが多いかなって思います。この本の中に12~14歳くらいの少女が主人公の話があるんですけど、マッカラーズは成長期の子供たちを描くのがすごく上手で。マッカラーズに出会ってから、子供の成長とかに興味を持ち始めたというのがあります。マッカラーズとか、トルーマン・カポーティ、ウィラ・ギャザーなどの作家を通して、子どもの成長だったり、子どもの成長とジェンダーセクシャリティをくっつけた分野に興味を持ち始めました。



『心は孤独な狩人』  
カーソン・マッカラーズ／著  
村上春樹／訳  
新潮社



『遠い声、遠い部屋』  
トルーマン・カポーティ／著  
村上春樹／訳  
新潮社

ーこれからバンドもしくは個人でやりたいことはありますか？

**Miya:** バンドでは、みんなで話してるのは、やっぱり世界に出たい。Ålborgは今月（取材時）初めて台湾に行くんですけど、「もっともっといろんなところ旅したいねー、5人+かほさんも入れたら6人で旅したいねー」って話してます。正直どこでもいいから（笑）、広い世界をみんなで見たいっていう感じです。

ー他のインタビュー記事では「バンド名の由来になったオールボーでライブをしたい」というお話もありました。船橋市にも、デンマークにちなんだ施設があって…アンデルセン公園はご存知ですか？

**Miya:** 船橋市でしたね確かに（笑）！まだ行ったことはないんですけど、名前は知ってます。

ーちょうど今週（取材時）放送の「出没！アド街ック天国」が船橋市特集で、その中でも紹介されていました。ちなみに来週（取材時）は横浜駅特集でした（笑）。\*Ålborgは横浜で結成されたバンド

**Miya:** えっ！？横浜駅ですか？今度はこちらに（笑）。

ーはい（笑）。機会があったらぜひ、船橋に来ていただけたら嬉しいです。

**Miya:** ライブしたいです。

ーライブのMCではいつも、くるみさんが日々のこと、Miyaさんが「こうやって、音楽が好きな皆さんが集まってくれてありがとう」というよう

なことをお話をされている印象があります。バンド全体としてこういうことを、曲もですが、言葉でも言っていこう、みたいな風に考えている部分がありますか？

**Miya:** 改めて言われると恥ずかしい(笑)。

…そうなんです。話したりします。誰が言ってもよくて、みんな思ってることなんですけど。くるみちゃんはチューニングをしなくていい楽器を使ってるので、最初の頃は「(ライブで)チューニングの時間、暇そうにしてるなあ」って思ってた(笑)。で、「くるみ喋ったらー?」ってなって「じゃあやるよー」って。それでMCIは大体くるみがやってくれてたんですけど、だんだん「やっぱりMiyaちゃん喋らないの変だよー」ってなって(笑)、「あ、そっかー」ってなったから、私が言うことになっただけで。

私だけじゃなくみんなが思ってることなんです。

「音楽で何か、そんな大きくは変わらないかもしれないけど、みんなの毎日がちょっとハッピーになるかもしれないよね、みんながハッピーになったら、世界がちょっとハッピーになるかもしれないよね」という話をして。ウクライナへの軍事侵攻や、パレスチナへのジェノサイドのことを見たとき、みんなでスタジオに集まったりして。もちろん話すじゃないですか。「これで昨日落ち込んだな」とか「大丈夫だよ」とか。その時に「これ、私たちだけじゃなくてライブに来てくれる人もそうだし、ライブを主催してくれてる人もみんなちょっとずつ悲しい気持ちになっちゃってるかもしれないよね、みんなで、『私



『ある日、戦争がはじまった』  
イエバ・スカリエツカ/著  
神原里枝/訳  
小学館



『中学生から知りたいパレスチナのこと』  
岡真理, 小山哲, 藤原辰史/著  
ミシマ社

も悲しいよ』っていうのを共有できるだけでも、なんか安心するよね』っていうのがあって。なんか、説教くさいのはイヤだけど、でも、ライブでせっかく表現する場にあるし、コミュニケーションが取れる場にあるなら「音楽が好きで集まったこの瞬間、これだけでも強いパワーになると思うんです』っていうのが。で、『それであなたの生活がちよっとハッピーになったらいいなって思うんです』っていうのが伝えたいね』って話しました。MCでそれを言ってるのが私なのは、本当たまたまです。それぞれみんなに確認して、Ålborgが思ってること。私たちが思ってます、ということです。



—これは私だけではないかもしれませんが、自分の好きな人たちがそういう風に言うてくださるのはホッとするというか、「同じように思ってるのかもしれない』っていうのが言葉として入ってくるので、嬉しいです。国内外で悲しい出来事がたくさんあって「どうしたら止められるんだろう」と落ち込むこともあるんですが…。以前のライブのMCでくるみさんがおっしゃっていた「それぞれがやれることをやろう」という言葉も、心に残っています。

—今回のインタビューがYAだよりに掲載されるということで、学生の皆さんに伝えたいことがあればお願いします。

**Miya:** いやあ…責任重大じゃないですか(笑)。中高生…一番感受性が豊かな時期に、伝えられること…あるのかなあって考えてたんですけど、ほんとありきたりになっちゃうかもしれないんですけど、いろんなことを考えて、考えたり悩んだりして、夢中になったりして、たくさん自分のことを知って、自分を色んな方法で愛してみてくださいっていう。やっぱり、自分のことって案外わからない気がします。ありきたりかもしれないんですけど、自分のことを好きになれたら、すごくいいと思う。

自分の好きなものをたくさん作る。映画、本、曲。大きい壁にぶち当たったときに、自分のこと嫌いになっちゃいそうになる…けど「好きな人たち、好きなものがあるから大丈夫！」って思える気がします。

## Ålborg (オールボー) プロフィール

2022年に横浜で結成されたインディーズロックバンド。同年8月に1st Single『Girl』をリリースして以降、横浜、東京を中心に注目を集めている。現在配信にてシングル曲を7曲リリースしており、昨年7月にはカクバリズムから配信シングルとÅlborg初の7inchをリリース。トロンボーン、フルート、スティールギターなど多様な要素から成る奥深い楽曲が初めて見る人をも魅了する、素敵な5人組である。今年7月に1stアルバム「The Way I See You」をリリースした。

### 写真左から

くぬぎみなど

**功刀 源** (ギター)

みや

**Miya** (アコースティックギター・ボーカル)

いわかたろくろう

**岩方 禄郎** (ドラム)

やすだ

**安田 くるみ** (トロンボーン・コーラス)

かまた たつや

**鎌田 達弥** (ベース・コーラス)



YouTube



TikTok



Instagram



# ブックリスト

インタビューで話題に上がった本、関連するテーマの本を集めました！

★はMiyaさんのオススメ本です。

『英語、苦手かも…?』と思ったときに読む本』

デイビッド・セイン/著 河出書房新社 830.7/t (YA)

『彼岸花/秋日和』里見淳/著 中央公論新社 F/外

『北欧の美しい図書館』小泉隆/著 エクスナレッジ

★ 『心は孤独な狩人』カーソン・マッカラーズ/著 村上春樹/訳 新潮社  
933.7/マツ

★ 『マッカラーズ短篇集』

カーソン・マッカラーズ/著 ハーン小路恭子/編訳 西田実/訳 筑摩書房  
933/マツ

★ 『遠い声、遠い部屋』トルーマン・カポーティ/著 村上春樹/訳 新潮社  
933.7/ホ

★ 『ここから世界が始まる』

トルーマン・カポーティ/著 小川高義/訳 新潮社 933.7/ホ

『ハマれないまま、生きてます』

栗田隆子/著 創元社 367.6/ク (YA)

『社会問題のつくり方』荻上チキ/著 翔泳社 309/オ (YA)

『イラストでわかる映画の歴史』

アダム・オールサッチ・ボードマン/著 フィルムアート社 778/イ

『僕はウォーホル』

キャサリン・イングラム/文 アンドリュー・レイ/絵 岩崎亜矢/監  
安納令奈/訳 パイインターナショナル 723.5/イ

『ある日、戦争がはじまった』

イエバ・スカリエツカ/著 神原里枝/訳 小学館 986/ス (YA)

『中学生から知りたいパレスチナのこと』

岡真理, 小山哲, 藤原辰史/著 ミシマ社 227.9/チ

『僕らは戦争を知らない』小泉悠/監修 Gakken 319.8/ホ (YA)

## 担当より

今号からYAだよりがリニューアルしました。いかがでしたか？

インタビュー企画は東図書館YAだより史上初の試みでした。

Miyaさん、ありがとうございました😊🎵

お話を聞いて光栄でした。好きな人の好きなものに触れてみることで、自分の世界が広がったり、知らなかった世界が見えてくる…そういうことってあると思います。

みなさんもぜひバンド・Ålborgの魅力に触れてみてくださいね。

ブックリストに載っている本は、2階YA展示コーナーに展示していますので、ぜひ手に取ってみてください😊

今後も楽しい内容をお届けできるようがんばります(^ ^)

それではまた次号で👏

YAだより (Vol. 29) 令和6 (2024) 年11月発行  
船橋市東図書館 YA担当 047 (463) 3611

X



HP



Facebook

